九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

〈54運動〉研究史試探

大塚, 博久
山口大学教育学部

https://doi.org/10.15017/18063

出版情報：中国哲学論集. 6, pp.51-67, 1980-12-21. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：

〈五四運動〉研究史試探

大塚博久

はじめに

昨七九年は、〈五四運動〉六十周年の歳に当った。中国では五月三日北京の人民大会堂において盛大な記念大会が催され、華国鋒主席が記念の講話を行ったが、社会科学院においても五月三日から九日まで学術討論会を主催したほか、当時の関係者を招いて座談会を開催した。また、〈五四〉を契機に成立した中華全国学生連合会も第十九回代表大会を開いて、これを記念した。

顧みれば、〈五四運動〉から、「四つの現代化」による社会主義強国の実現を目指して「偉大な歴史的転換」を決意するに至った今日までの六十年間、現代中国史途上には幾多の変転曲折があった。〈五四運動〉に始まる反帝反封建の運動は、一九一九年十月孫文による中華革命党の中国国民党への改組と、一九二一年七月の中国共産党の創立に結実し、以来、世界史の一環をなす中国における帝国主義と民族主義との矛盾を背景に、国共両党の融和と対立、合作と内戦、すなわち、一九二四年の第一次合作、二五年の北伐戦争、二七年の〈四・一二〉クーデター、土地革命と推移し、〈九・一八〉さらには〈七・七〉以降の日本の侵略に対して抗日民族統一戦線を結成して惨勝し、第三次国内戦争を経過して一九四九年の中華人民共和国成立に至るいわゆる「新民主主義」革命段階の三十年間と、それ以後の社会主義への移行過程、一九五九年の全人代第二回大会における劉少奇国家主席就任、中共八期八中全会廬山会議、六六年以降のプロレタリア文化大革命の発動、六九年の林彪を後継者と規定する中共九全大会、七六年の「四人組」追放と文革終束による今日までの「社会主義」革命段階の三十年間を経過してきた。そうして、〈五四運動〉はその道程の節目ごとに、当面する政治課題との関連において回顧され、意義づけられてきたのである。

〈五四運動〉とはこの場合、五・四運動事件を中心に、その前段をなす一九一五年の『青年雑誌』=『新青年』発

刊に始まる新文化運動および「二十一ヵ条」反対以降の大衆運動と、一九二一年の共産党創立に至る後段の展開過程を含む〈五四時期運動〉を指すのであるが、それは、「民国」の虚妄の内に胚胎した新しい覚醒が内外の情勢と結合して幾多の局面と内容を産み出し、それ以前とは全く異った新しい位相をもつが故に、現代における歴史的教訓として位置づけられるのである。その中のなにを教訓とし、なにを評価するかという時代的選択は、動態的な（革命）運動上の要請によって異なることはいうまでもないが、その事情は〈五四運動〉研究史においても例外ではなかったように見受けられる。

今日においては〈五四運動〉は「最初の思想解放運動」[1]として把握され、とくに〈新文化運動〉の「科学」と「民主」の提唱が評価されている。[2] それは今日が「第三回目の偉大な思想解放運動」[3]の時期であるとの認識から必然的に出てくる評価であるが、〈五四〉の後、民主と科学のスローガンについては林彪・「四人組」支配の一時期を除いて党が一貫して継承発展させてきたすぐれた伝統であるとしている。だが前記「学術討論会」で「社会科学の研究にあっては、民主の精神は、まず平等の態度で自由に討論を行い、すべてはただ真理にのみ従うことを現わすとともに、科学的研究の対象はいかなる制約をも受けつけるべきでなく、〝科学に禁区はない〟ことを示す。」[4]とし、「民主なければ科学なし」と強調されなければならないことは、歪曲がその一時期のみのことであったかどうかを疑わせる。さればこそ、研究の在り方における新しい段階の到来を強く希求するものであろう。また、「理論と実際を結合させることは、毛沢東同志が一貫して唱え、育ててきた学風である」が、「マルクス・レーニン主義毛沢東思想の基本的原理から離れれば、方向を見失ない脇道にそれるに違いない。反対に、もしもマルクス・レーニン主義と毛沢東思想を永久不変のドグマとして棒暗記すれば、これまたいかなる問題も解決できないであろう。」[5]との、華国鋒講話の一節は、一歩進んで、教条の「神学」的呪縛からの解放をも示唆しているようにも思える。とはいえ、これは政治的発言であり、今日における現実の〈五四運動〉研究がいかなる様相において捉えられるかは、また別の次元に属する。

われわれが今日、中国の〈五四運動〉研究の状況をとりあげることの意味は、毛沢東の『新民主主義論』をはじめとする著作によって「新民主主義革命」の序幕と位置づけられて評価され、その革命的精神の継承のもとに一連の現代革命の展開がなされた事実に対して　中国の学界が現在、それを前提としながら、〈五四運動〉にいかなる検討を

加え、それを通して総体としての「中国現代史」をいかなる志向性において構築しようとしているかを模索し、今日の「思想解放」運動の内実を問いたいという、思想的な関心にある。とすれば〈五四運動〉に関してはさしずめ、史的展開過程における時代の関節ごとの政治的要請としての〈五四〉評価、および研究史の概略、新段階における研究状況との比較検討に向けられなければなるまい。だが、国内外の政治的経済的背景、ロシア十月革命の影響、運動過程、運動論、思想・文学運動、人物評価など多岐にわたる問題領域と、ぼう大な数にのぼる論考すべてを概括する能力も余裕もないので、ことがらは自らきわめて限定された「五四運動の性質」の検討に終る点を予めお断わりしておきたい。

一、毛沢東の〈五四運動〉評価

周知のように毛沢東は、〈五四〉前進文化運動の高まりのなかで湖南において『新民学会』を組織し、その後一九一八年九月から翌年初めにかけて留仏勤工倹学運動組織のために北京に滞在中、当時、李大釗、陳独秀を指導者とする新文化運動の拠点北京大学の革新的空気に触れ、〈五四〉勃発の報が伝わるや『湖南学生連合会』を成立させて、これに呼応して活動した、いわば五・四世代の青年であった。こうした体験を有する毛沢東は、抗日戦争のさなかの一九三九年五月、〈五四運動〉二十周年を記念して、従来学生運動としてのみ評価されてきた〈五四〉を、広汎な青年すべてが記念し継承すべき運動として、この日を「青年節」と制定するとともに、『五四運動』と題する論文〔A〕[6]を書き、『青年運動の方向』と題する記念講話〔B〕[7]を行って〈五四運動〉に対するまとまった見解を述べた。その中で毛沢東は、〈五四運動〉が「反帝反封建のブルジョア民主主義革命の新しい段階への発展を示す」ものとし、「文化革新運動はその一つの表現形態である」とするとともに、民主主義運動で最初に目覚めるのは知識人層であると認めつつ、〈五四〉などの失敗の経験から「知識人、学生が労農大衆と結合することの必要性」[8]を強調した。

翌四〇年一月、国民党が反共主義を強める一方、日本との和平交渉が取沙汰され、具体的に汪兆銘が投降するという時期に当って、抗日統一戦線の一層の強化と、将来の新中国の展望を示すため、当面の革命を新民主主義革命と規定する綱領的文書『新民主主義論』〔C〕を発表し、その中で〈五四運動〉の性格規定を行い、これが以後の定式的な

評価となった。さらに、四二年二月、延安における整風運動の発動に関して行った講話の一つ『党八股に反対しよう』〔D〕において、五四新文化運動の評価を行い、その成果と欠陥を指摘した。

以上の諸論文は行論上不可欠のものであるが、〔A〕、〔B〕論文は同巧異曲のものであり、〔C〕において発展的に概括されているので、〔C〕、〔D〕論文を中心に毛沢東の論断をみておくことにする。ただしここでは人民出版社六一年版『毛沢東選集』により、その箇所を指摘するに止め、必要な場合のみ最少限の原文を示しておく。（傍点筆者）

㈠ 〔C〕論文『新民主主義論』

① ＜五四運動＞の歴史的意義とその性格ー〔毛選第二巻〕一三「四個時期」六九二頁八行・・㋑「一九一九年五四運動到一九二一年中国共産党成立。這一時期中以五四運動為主要的標誌。」～九行。㋺十行・・「五四運動是反帝国主義運動、又是反封建運動。五四運動的傑出的歴史的意義、在於它帯着為辛亥革命還不曽有的恣態、這就是徹底地不妥協地反帝国主義和・・・反封建主義。五四運動所以具有這種性質、是在当時中国的資本主義経済已有進一歩的発展、当時中国的革命知識分子眼見得、俄、徳、奥三大帝国主義国家已経瓦解、英、法両大帝国主義国家已経受傷、而俄国無産階級已経建立了社会主義国家、徳、奥（匈牙利）、意三国無産階級在革命中、因而発生了中国民族解放的新希望。五四運動是在当時世界革命号召之下、是在俄国革命号召之下、是在列寧号召之下発生的。五四運動是当時無産階級世界革命的一部分。五四運動時期雖然還没有中国共産党、但是已経有了大批的賛成俄国革命的具有初歩共産主義思想的知識分子。五四運動、在其開始、是共産主義的知識分子、革命的小資産階級知識分子和資産階級知識分子（他們是当時運動的中的右翼）三部分人的統一戦線。它的弱点、就在只限於知識分子、没有工人農民参加。但発展到六三〇運動時、就不但是知識分子、而且有広大的無産階級、小資産階級和資産階級参加、成了全国範囲的革命運動了。～六九三頁七行。

② 新民主主義段階は＜五四＞より始まり、以前と以後とは全く異なる。それは自覚をもった独立した階級としてのプロレタリア階級の政治的登場である。ー（五、「新民主主義的政治」）六六五頁八行～六六六頁四行。

③ 新民主主義文化の規定ー（一一「新民主義的文化」）。㋑六八八頁一行～八行。㋺その画期は文化上も同じー六八九頁六行～十行。

④　五四文化革命の性格ー（一三「四個時期」）六九三頁七行～「五四運動所進行的文化革命則是徹底地反対封建文化的運動、自有中国歴史以来、還没有過這様偉大而徹底的文化革命。当時以反対旧道徳提唱新道徳、反対旧文学提唱新文学、為文化革命両大旗幟、立下了偉大的功労。‥‥」～六九三頁十三行

⑤　中国文化革命の歴史的特徴とその状況ー（一二「中国文化革命的歴史特点」）六八九頁一二行～六九二頁一行。

(二)　〔D〕論文『反対党八股』

①　歴史的にみれば洋八股、党八股は五四運動の本来の性質に対する反動である。ー〔選集第三巻〕八三二頁二行「‥‥五四運動時期、一班新人物反対文言文、提唱白話文、反対旧教条、提唱科学和民主、這些都是很対的。在那時、這個運動是生動活潑的、前進的、革命的。‥‥這就是説、洋八股、是五四運動本来性質的反動。」～八三三頁一行。

②　五四運動の欠陥の指摘、ブルジョア的＝形式主義的方法に対する批判。八三三頁一行～一六行。

二、四九年～七四年の過程における〈五四運動〉の政治的評価

偉大な転換点をなした一九四九年以降の〈五四運動〉の政治的意義づけ、あるいは教訓の在り方を、三十周年、四十周年、文革初期、五十周年、五十五周年などの節目において発表された公的機関の声明、機関紙誌の社論などから概観する。

(一)　『三十周年』ー一九四九年五月

全国解放を目前に控えた一九四九年五月五日、北京解放後はじめて唯一〈五四〉を記念して開催された中華全国青年第一回代表大会における「中国人民解放戦争中の青年運動と今後の基本的任務」と題する廖承志の講話⑨は、人民民主革命の勝利と大規模に工農業の回復、発展に着手すべき時代に当っての「青年の基本的任務は学習である」とし、第一に「わが新中国立国の原理である新民主主義を学習し、科学と文化を学習することである」と強調している。そうして「毛沢東の国家、民族および人民の利益に忠実な原則的精神、人民に服務する革命精神、実事求是の科学的精神を学習」すると同時に、「繁栄した富強の新中国を建設するため、必ず一定の文化水準を持ち、‥‥必ず現代の科学的知識の研鑽に努力す」べきことが要請されている。〈五四〉を記念しながらも、そのものへの言及はない。眼はより

将来に向けられているのであろうが、〈五四〉の科学精神を意識する論調であることは理解される。

㈡ 『四十周年』―一九五九年五月

人民日報五月四日付社論は、この年三月勃発したチベット反乱事件を受けて、「五四時代の人民が夢に求めた理想はすでに眼前にくりひろげられ光り輝く現実に変ったが、反帝の闘争はまだ終っていない」として、「全国青年が反帝の光栄ある伝統を継承し発展させ、全国人民が一致団結して徹底的にチベット上層反動派の反乱を平定し、帝国主義と印度反動派のわが国の内政に対する干渉…を粉砕しなければならない。」とする。また五七年の反右派闘争、五八年の大躍進失敗を受けてか、「今年は第二次五カ年計画の第二年であり、苦戦三年の決定的意義をもつ年である」から、青年が「絶えず革新し学習に努力し、争って社会主義の突撃手となるべきこと」を訴え、「青年とくに知識青年が必ず緊密に労農大衆と結合して、マルクス・レーニン主義で自己の思想を武装し、生産闘争を推進すること」を、毛沢東の『五四運動』〔A〕を引用して強調し、現在旧知識層の改造が進み、新知識人が育成されつつあるが、労働人民との結合、教育と生産労働との結合方針の貫徹は、長期かつ困難な課題であるとし、知識人に各様のブルジョア的観点からの徹底的な決別を迫っている。この社論は知識人に厳しい側面をみせ⑩、反右派闘争の後遺症の深さを伺わせるが、同日の『人民日報』掲載の郭沫若の〈五四〉四十周年記念大会における開会の辞では、「社会主義文化を発展させ、我が国の科学と芸術を繁栄させるためには、社会主義に服務するという前提のもとで、引き続き"百花斉放、百家争鳴"の方針を貫徹せねばならない。学術上の自由な論争、異なる学派の対立は、必ず学術自身の発展を大いに促進すると信じている。誰しも真理はいよいよ弁ずればますます明らかになるものであることを知っている。五四時代の多くの先駆者たちのあの真理探求と真理を堅持する精神は学ぶに値いする。文学芸術においても同様である。」と述べている。これは、五七年二月の毛沢東『正確に人民内部の矛盾を処理する問題について』と『党全国に宣伝工作会議』における教条主義反対、双百方針の提起の路線に従うものであるが、社論との論調の違いは明らかであり、複雑に揺れる政治状勢を反映している。

㈢ 『文革初期』―一九六六年～六七年

文革が発動される直前の一九六六年の『青年節』には機関紙誌における〈五四運動〉への直接の言及は見当らない。

緊急の事態にあったのであろう。『解放軍報』五月四日付には「絶対に階級闘争を忘れない」と題する社論を掲げ、いま文化戦線で展開されている大論争は、決して文芸上、学術上の論争ではなく、先鋭的な階級闘争であり、毛沢東思想を守る原則的闘争、イデオロギー領域での無産階級と資産階級の闘争であるとし、〔C〕論文③の㋑などを引いて、労農兵がこの文化大革命の主力軍として、さまざまな学術的「権威」を打ち破ることを主張している。『紅旗』第六号も同様趣旨の『労農兵大衆の学術批判への参加は、画期的なできごとである』という評論員論文を掲げて、〔A〕論文の「知識人が労農大衆と結びつかなければ、なに一つなしとげられない」という論断をもとに呉晗の『海瑞免官』の批判の深化発展を求めている。翌六七年の『青年節』には人民日報が「知識青年は労働者、農民と結びつかなければならない」との社論を載せ、「わが国の青年運動史には二つの路線の先鋭な闘争がずっと存在していた。毛主席に代表されるプロレタリア革命路線は、終始労農大衆と結びつく大方向を堅持してきた。」とのべ、毛主席の〔A〕、〔B〕論文は、「ほかでもなく、このプロレタリア革命路線に対するもっとも高度な概括である。」とし、陳独秀、張国燾に代表される、青年運動のなかの逆流に鋭い批判を加え、革命的な青年運動に明確な方向を指し示した毛沢東の著作発表後わずか二カ月後、劉少奇が『共産党員の修養を論ず』（一九三九年八月）を出版して敵対したと断じ、標題の主旨を展開している。この時期は、〔A〕、〔B〕論文の知識人批判が強烈な機能を果している。

㈣ 『五十周年』―一九六九年五月

中共党九全大会の開催、『新党規約』における後継者林彪規定を受けて迎えた五十周年は、五月四日三紙誌共同社論「五四運動五十年」が発表された。この論文は〔A〕〔B〕〔C〕論文を今一度改めて学習し、「こと半世紀の革命運動の歴史を振返ってみる時、われわれがしみじみ痛感するのは、毛主席が指し示した方向こそ青年運動の唯一の正しい方向だということである。」とのべ、〔C〕論文①の㋺にいう五四運動が「徹底的に妥協なく帝国主義、封建主義に反対する」運動から毛主席に代表される中国共産党と毛沢東思想を生み出したことの革命的な意義と、同、〔C〕の④にいう五四文化革命の意義をふまえて、とくに五四の「孔家店打倒」のスローガンを評価し、「五四運動以来の闘争史は、孔家店とすべての搾取階級の思想の砦を本当に、断固として、徹底的にたたきつぶしたのは労働者階級とその指導下にある革命隊列だということを、この上もなくはっきりと立証している。」といい、最初このスローガンに賛成し

ていた知識人の右翼がいち早く裏切ったように、知識人は動揺的であり改造以外になく、労働者階級は文化の各領域を含む上部構造でもブルジョア階級に全面的独裁を行い、プロレタリア階級の世界観によって世界を改造し、あらゆる搾取階級のイデオロギーに勝たねばならない、としている。この傾向は『五十五周年』の一九七四年になると一層強まり「〈五四〉の輝かしい伝統をもつ北京大学の労農兵出身学生は、五四運動五十五周年を前に、〈五四〉の反孔闘争の革命的伝統を発揚し、〈批林批孔〉闘争を最後まで進めるための専門講座を組織した」（人民日報五月三日付）と報道されるようになる。『紅旗』第五号の「五四時期批孔闘争の歴史的経験」と題する記念論文は、たとえば「D」論文の②の形式主義批判を引いて、「この欠点は、当時多くの人が批孔闘争において、歴史上の階級関係についての科学的分析を行い、儒法闘争の階級内容を暴露することができなかったからである。また法家の歴史的進歩作用や、法家の批孔闘争のなかで書かれた若干の著作に対して、マルクス主義的研究が欠如していたのである。」とまで、いうに至る。批劉が批林に変ったものの一層激しい批孔＝評法のいわゆる「儒法闘争」史的史学革命の只なかにあったのである。毛沢東によって〈五四〉文化革命の主将と賞揚された魯迅も、この頃は反孔思想の一点でのみ評価される（申越・・「論魯迅小説的反孔思想」『学習与批判』七四年第八号）のである。

三、文革前の〈五四運動〉研究

以上の時期に対応する研究状況はどうであったか。この時期の〈五四運動〉研究は、「四十周年」に当った五九年をピークに五七年～六三年の間もっとも盛りあがり多数の論文が発表されたが、文革中は全く停頓した。当時の研究は、大むね毛沢東の論断ー中国の民主革命過程は〈五四運動〉を指標として旧民主主義革命と新民主主義革命の段階に画期され、〈五四運動〉は新民主主義革命の範疇に属するとともにその始まりとなったーに従って進められたが、個別研究の深化とともに個々の歴史的事実に対する定式の適用、解釈をめぐって見解を異する問題も起った。六一年から六二年における、新民主主義革命の指導階級とされるプロレタリア階級（『中国革命と中国共産党』第五節「中国革命の性質」の規定）は、〈五四〉のどの時点から即自的なものから自覚的で独立した「対自」的階級に変化したのか、についての論争もその一つであるが、やがて起った〈五四運動〉の性質、指導層の問題をめぐる論争は、より

典型的な形で現われた点で注目すべきものであった。この論争の発端は、朱務善が、『歴史研究』六二年第四号に発表した「五四運動は新民主主義革命か」と題する論文において、『紅旗』六一年第十四号所載の「発展過程における部分的な質的変化を論ず」という呉江論文を批判したことに始まる。

朱務善は、呉江論文が、毛沢東の『山西・綏遠解放地区幹部会議での演説』における「新民主主義革命の指導者はプロレタリア階級と共産党である」との規定を指標に、「五四運動以後、矛盾および矛盾相互の変化によって、この革命の指導権は、プロレタリア階級と共産党の手に移った。」「これによって民主革命の新段階が形成され、新しい形式の民主革命段階が形成された」として、〈五四運動〉を北伐、土地革命などと同じ段階に属する性質の革命と捉えたことを批判して「歴史的歪曲である」とした。彼はこの場合、毛沢東の諸論文の引用によって成立する「新民主主義革命」の概念を尺度として、運動過程の実態に照応させることによって事実認識の誤りを衝く、という方法によりながら、実は体験的事実の正当性を立証しようとしたのである。彼は一九二〇年三月に発起した「北京大学馬克斯学説研究会」の一員として、その回想録をも記した人物であるが、[11] たとえば一九一八年に成立し、五四運動を指導したとされる北京大学「馬克思主義研究会」は、実は「馬爾格斯学説研究会」と称し、その参加者は、李大釗、高一涵ら少数の教授、学生に限られ、多くの青年の参加も発展もなく、社会の活動に顕著な作用をも与えなかったので、当然運動を指導する力量を持たなかったという事実をあげ、当時日本の出版物が誤り伝えた消息に基づくこうした臆説を科学研究に当っては排除しなければならないという。また五月四日から六月十一日に至る全国的な大衆運動の高揚も、自発的な運動であって、事前になんらの行動計画もなかったといい、結局〈五四運動〉は旧形式の革命運動とは異なり、〔C〕論文①のロにいう、十月革命と世界プロレタリアート運動の影響下に、反帝反封建の旗幟を鮮明にした新民主主義的色彩を帯び、初歩的な新民主主義的形式を表わしたという意味で、新民主主義革命の序幕となったのであって、正しくは「新民主主義の開始をなした」というべきである。哲学的タームで表現すれば部分的な質の変化であって、主張されるような全面的な質の変化ではない。それは毛沢東も明確にいう「一九二一年の共産党成立以後〔C〕のことであると主張した。

この論文に対しては若干の賛成もあったが多数の批判が寄せられた。その代表的な論文が六三年『哲学研究』第二

号上に載った林傑の「朱務善同志と五四運動の性質について検討する」という論文である。その主旨は、〈五四運動〉が「プロレタリア階級の指導がなく」「労働者階級も運動に指導的作用を起さなかった」とする朱務善の説に対し、「五四運動はプロレタリア階級の指導する新民主主義革命である」と主張することにある。かれはまず毛沢東の示した「新民主主義革命」の枠組によって次の四点をあげている。①〈五四〉はロシア十月革命以後に発生した事実から、世界プロレタリア階級革命の一部分であり、プロレタリア階級の指導する範疇に入ること。②第一次世界大戦中に中国資本主義は一段と発展し、労働者数は一九一三年の六五万人より一九年には三百万人近くに達した。〈五四運動〉中、上海、唐山、長辛店などの労働者は反帝闘争に始めての政治ストをもって参加し、かつマルクス・レーニン主義の影響を受け始めていた事実から、プロレタリア階級は明らかに独立した行動を取り始め、独立した政治力量を備えていたといえる。彼らは初歩的な共産主義思想をもった知識層を通じて自己の政治的主張を提出し、五四運動の方向に決定的作用を及ぼした。③当時共産党はなかったが、ロシア革命に賛成する多数の初歩的共産主義思想をもつ知識人が存在し、それらが当時のプロレタリア階級を代表して五四運動を指導した。④「五四運動は徹底的に妥協なき反帝反封建の革命運動であった」（〔C〕①の㊀）。現代の中国において、このような行動をとれるのはプロレタリア階級だけであり、従って、五四運動はこの階級の指導したものだといい得る。だが朱務善はプロレタリア階級の指導権を否認し、「中国の知識人と青年学生が指導した」というが、ではこれらはいずれの階級に属するのか、彼の観点ではいずれの階級にも属さず超階級的存在のように思えるといい、ここで、朱務善の根拠とした『中国革命と中国共産党』原文の引用の仕方をとりあげ、自己の論証に不都合な部分を省き、毛沢東の結論と正反対の結論を導いたときめつけ、毛沢東の『新民主主義論』〔C〕は、「十一節」、「十二節」、「十三節」の記述からすべて「新民主主義革命は〈五四〉より始った」と理解されうることを強調する。

次に、朱務善の持ち出した事実からは彼の結論を証明できず、結論も正しく事実を概括したものではないと批判し、彼の事実研究は、表面的形式的なものに停っていて本質と内容に深く立ち到ったものではないとし、〈五四〉以前における、李大釗諸論文の十月革命賛美と、国内労働者のスト展開の事実をとりあげて反証し、歴史的事実を尊重することは基本的前提ながら、客観的事物の本質関係を反映する事実から出発して結論づけなければならない。また事物

が旧物質から新物質へ転化するかどうかの判断は、全面的な質の変化を生じたかどうかではなく、それが根本的変化をもたらし、ある事物の新しい質が主導的地位を占めたかどうかにある。旧民主革命がすべて質的変化を起して後はじめて新民主主義革命段階といえるという朱務善の「全変」説は機械的な捉え方であるとしたのである。林傑の以上の観点は、〔C〕論文①の㊀の「三つの部分からなる統一戦線」という見解を、統一戦線の場合においても、必ず主導者があるべきであり、それは初歩的共産主義思想をもつ知識人であると、発展的に解釈したことから導き出されたものである。

この論争に参加した研究者の多くは、⑫朱務善論文が結局〈五四運動〉は旧民主主義革命に属すると主張したも同然であり、毛沢東の科学的論断に違背するものだと認めている。そうしてそれはなによりも彼の毛沢東論文解釈の観点に問題がある。具体的な事実の提出も全般的把握に欠ける、つまりはマルクス主義的史観に立脚していないという批判であったが、一面この論争を通じて毛沢東の「文化革命」（〔C〕の④⑤）の規定性の不明確さが意識されるに至った。この点に関し、孫思白の一連の論文のうち、「五四文化革命の分期およびその前後期の転化に関する試論」（『歴史研究』六三年第二号）は、独自の見解を示したことによって一定の意義が認められるであろう。

それは、〈五四時期〉を広義と狭義とに区分し、広義には一九一五年九月の『新青年』創刊から一九二一年九月の中国共産党成立までとし、狭義には一九一九年五月四日から六月二八日中国のパリ講和会議での調印拒否までとする。そうして〈五四文化革命〉は「五・四」を画期として前期、後期に分けられるとした上で、〈五四運動〉の性質は広義には新、旧民主主義的性質のいずれをも含むが、狭義には新民主主義的性質をもっているとし、歴史的事件の性質と時期との両概念は固定的ではなく、それ自身、絶対的一面と相対的一面とがあり、両者は一致もするし区別もある。ある性質の歴史的事件の長い過程においては、若干の個別的時期に区分することができると同時に、異なる性質のものをも包含することができる。主要な観点はどの角度からこの歴史過程を分析するかどうかである、といい、毛沢東の『新民主主義論』（〔C〕の④）の論断は、広義の〈五四時期〉全体の性格内容を指すものであり、「徹底地反対封建文化的運動」の「徹底」とは、前期にあっては「主に貢献したのはプチプル階級の文化代表」であり、後期にあっては「マルクス主義者の功労である」とした。彼はこうした観点に立って別に「陳独秀前期思想の解剖」（『歴史

教学』六三年十月号）を書き、さらに実証的な研究を目指さんとしたが、忽ち反徒を持ちあげるものとする激しい非難を浴びた。[13]以上のように、この論争は〈五四運動〉の性質を明らかにする上で一定の学問的深化があったが、一方事実研究は常に教条との斉合性を求められ、やがて階級的立場、観点、さらにはプロレタリア感情の有無が論争に持ち込まれるに至り、不毛の結果に陥ったのである。

四、新段階における〈五四運動〉研究

今日の〈五四運動〉研究の新しい趨勢を示すものは、まず新刊、再刊、増補改定を含む多数の資料集の刊行である。『五四時期的社団』、[14]『五四愛国運動檔案資料』[15]などの新刊、『五四運動回憶録』、『五四愛国運動』などの増補版『五四運動文選』などの改訂版、『五四時期期刊介紹』などの再版、さらには『少年中国』、『晨報』などの覆刻が続々刊行されている。これらで興味深いことは、たとえば『五四時期湖南人民革命闘争史料選編』が正反両面の資料を均しく採録したと出版説明しているように、[16]客観的な資料提供を意図しているのと、再版などが殆んどかつて五九年に出版されたものであり、新刊の中にもたとえば『李大釗伝』[17]のように、すでに稿本ができながら文革によって出版不能になったものがあることである。かつて中国の学界は資料集の編集出版に意を用いた時代があったが、二十年の空白の後そのよき伝統が復活したというべきか、研究の基礎資料の提供に意欲的である。『五四運動回憶録』（上、下、続）は、四九年、五九年に出版された同種のものに較べ、収録内容が飛躍的に増え、人物回想も新たに任弼、高君宇、趙世炎、銭玄同、方舟、陳潭秋、王尽美、王若飛についてなされている。『同書（続）』に収録された、七九年五月四日開催の『五四時期老同志座談会』も興味あるもので、①〈五四運動〉の性質、運動の主力と形態、②十月革命の影響、中国共産党成立との関わり、③〈五四時期〉の思想状況、文化革命の問題、④人物評価などについて語られているが、事実認識の差に関しては、たんなる回想に止まらず、論議に及んでいる箇所もある。若干の発言を要約紹介すると、鄧潁超・・「私がみた若干の資料では、五四運動は十月革命の影響を受け、マルクス・レーニン主義の影響を受けたといっている。だが全く事実に合っていない。私たちの多くは運動に参加した時十月革命を知っていたが、まだマルクス・レーニン主義を理解してはいなかった。／あの頃は百家争鳴でいろんな思潮があった。私たち

も無政府主義思想の影響を受けたものだ。／[19]私は五四運動が思想上、組織上わが党の成立を準備するものであった、と考えている。」許聴珩・・「当時多くの人は旧礼教の打倒を主張していたが、陳独秀などは理論と実際とはかけ離れ生活は野放図であった。／五四は実際にはまず愛国運動であり、反帝であり、反軍閥であった。」茅盾・・「上海における陳独秀は革命家であったと確信している。／五四の功績は思想を解放したことである。私自身もそうで『新青年』の影響があったが、マルクス主義の研究には廻り道をした。その頃は共産党の指導がなかったのだ。／瞿秋白、鄧中夏らは上海大学とその後の一時期には党の事業に貢献した。」、楊秀峰・・「(楊東蓴が)五四運動は来る勢いも激しかったが、退潮も早かったというが、これは退潮でなく、大衆運動の高まりという深化発展である。」唐鐸・・「私はマルクス・レーニン主義の伝播は五四の前だと考える。その先駆は蔡和森である。／留仏勤工倹学運動は五四の一部分で、共産党成立に組織上理論上の準備をなした。」胡愈之・・「白話文を改めるには激しい闘争があった。これは胡適、陳独秀の貢献があった。」

以上のように今日においても依然〈五四運動〉の性質如何が重要課題であり、その見解は分れているが、『五四運動六十周年学術討論会』における黎澍の発言(「五四運動に関するいくつかの問題」[20])は、それが①自発的運動であったかどうか、参加者の自覚性はどうか、②反帝反封建の徹底性の問題はどうかについて、提起されている。

(一) 「五月四日の北京学生のデモは、多くの参加者の回想と事実から判断して、完全に自発的な三千名規模のものであり、厳密な組織的指導を欠如していた」と、かつての朱務善の主張を肯定し、「しかしこの少規模の運動の影響はきわめて大きく、当時全国いくたの主要都市に波及しただけでなく、少数の学生によって開始されながら労働者大衆の参加に発展していき、中国歴史に一つの新時代を画した。」と述べ、「この中国民族の新しい覚醒は反封建思想の新文化運動が先導したという点で、従来の革命と著しい相違がある。五四運動前の数年間に発展してきた封建思想に反対する革命は、封建専制主義の思想支配に対しかつてない猛烈な攻撃を行い、青年はこの最も頑固な陣地を破壊し、封建社会が有していた絶対不可侵の神聖性すべてを失墜させた。長期の専制支配下にあった奴隷ははじめて自我の目覚めを得、自己が独立した人格であり、人間の権利を有することを認識したのであって、これはブルジョア民主主義思想が啓発したきわめて必要かつ大なる意義をもつものであり、この覚醒なしには、民族意識と階級的自覚をもち組

織的反抗を行うことは不可能であった。まさにこのような思想的基盤をもつことによって十月革命と第一次世界大戦の引き起した世界的な革命思想を受容し、新たな革命行動と大衆的示威を敢行させることができたのである。〈五四運動〉は完全に自発的な反抗運動であったが、同時にそれは中国人民の自覚的反抗の開始であった。」とする。彼は従来の「自発的運動」という場合の捉え方とは全く別の角度から捉え、「自発性」とは近代的自我の目覚めの上に始めて賦与される個人の積極的な行動性であり、封建性と対決することによって獲得された個人の自覚がより高度に、より階級的に高まることにより、対自的な全体としてのプロレタリア階級が形成され、独立した政治行動が発揮されると考えており、半世紀余の〈四五運動〉＝天安門事件に至る大衆運動は「個人における絶えざる意識の高まりと、高い意識をもった大衆の絶えざる増加の過程」であったと総括する、大胆な考え方を表明している。

(二) 「われわれは毛沢東の『新民主主義論』〔C〕の記述を根拠に、〈五四運動〉と〈五四文化革命〉は徹底した反帝反封建的革命運動（①の㊀および④）とみなしてきたが、この『徹底地』という表現について、往々五四運動が封建性反対において、きわめて徹底していると理解してきたが、これははなはだ結論に反し形式主義に陥った解釈であり、事実上全面的な理解とはいえない。毛沢東の用いた「徹底」の語は、『不妥協』、『堅決』と同義である。決して当時すでに封建思想が除去されたと述べているのではない」。その例証として「『青年運動の方向』〔B〕の中で『五四運動は・・・失敗してしまい、中国はあい変らず帝国主義、封建主義の支配のもとにおかれた』といっている。前記〔C〕論文の評価は、当時帝国主義と封建主義に対して決然たる反対の態度をとったことを指しているのであって、反帝反封建運動の到達した程度を指しているのではない。」「五四運動が伝統的な封建思想文化にとりわけきっぱりした猛烈な攻撃を加えたのは、確かにある種の徹底した革命精神の現われであったが、その武器は当時中国では反封建作用に有効性をもつブルジョア民主主義思想であった。だが資本主義の思想と制度は世界的にはすでに反動、腐朽した旧い事物であり、加うるに中国のブルジョア階級は政治、経済的にきわめて軟弱であったため、この革命的な力は大きな限定を受けざるを得なかった。これが〈五四〉の反封建思想文化闘争を規定し、広さにおいても深さにおいてもきわめて不徹底なものにした。」「新文化運動の提唱者が五四運動前後に急速に分化し、一定の成果をあげた一時期の戦闘力を失ってマルクス主義にその地位を譲った。そうして思想界の新文化運動は共産党の指導する新民

主主義革命に発展した。この発展は国内の政治闘争の情勢を変え、思想文化領域の革命を暫く次要の地位に退かせてしまった。まさにそれが後に毛沢東が『党八股に反対しよう』において、封建主義的な旧八股、旧教条に反対する闘いは『五四運動の時期にはまだ発端にすぎなかった。全国人民を旧八股、旧教条主義の支配から完全に離脱させるためには、まだ大きな気力を費さなければならず、やはり今後の革命的改造途上における一大工事である』と述べた理由である。」という。ここに至って黎澍のいう意味が明確になってくる。つまり帝国主義と封建支配の社会的基礎は消滅して社会主義社会になったが、林彪「四人組」に攪乱されたことでも分るように現在は未だ個々人のうちに封建的思想、意識が残存し、依然それから離脱できず、社会主義の前進に大きな桎梏となっている現実を指摘しているのである。「われわれは意識形態の領域において封建的伝統に対する批判が〈五四〉以来不徹底であったことを認識すべきである」というわけである。率直にいって彼の〈五四〉評価はブルジョア的近代主義による果敢な反封建闘争とその成果を重視するものであり、従ってまたそれが不徹底であったことに欠点を見出すのである。確かにそれは只今の現実が提起する歴史的課題を解決する上での教訓、評価ではあるが、中国のおかれた〈五四運動〉を含む現代史過程の史的分析においては、圧倒的多数のおくれた農民がかえって革命的であると指摘される事実に対して、近代的自我の覚醒という観点だけでは、その客観的真実には迫り得ないのではあるまいか。過去の〈五四運動〉の主流的研究がプロレタリア階級の「対自性」の立証を求める余りに人民闘争の事実を誇大に理念化して評価したのと、それは同一の別の側面である。もともと西欧的近代の概念とは非相同的な中国においてこそ毛沢東理論は成立したのであるから、近代的「範型」の適用には慎重でなければなるまい。一方、黎澍が従来の教条的解釈とは異なる角度から新しい解釈を試みたことは、あたかも清末の革新思想が康有為の経典の新解釈より発して徐々に相対的独立性を獲得していったと同様の事態が予想される。今日の〈五四〉研究状況を黎澍の論調と傾向のみから判断することは危険かも知れないが、管見の論文は多く五四文化革新運動と「反封建思想」あるいは「民主と科学」の問題、つまり孫思白論文の区分に従えば、五四前期の「プチブル階級の文化代表」の指導した時期に集中している。黎澍の提起はこうした個別的実証研究によってより深化するのであろう。

註　釈

①③『人民日報』七九年五月七日付周揚「三次偉大的思想解放運動」―中国科学院主催五四運動六十周年記念学術討論会報告。

②④『人民日報』七九年五月一四日付、前記討論会記事、「把思想解放運動継続推向前進」

⑤『人民日報』七九年五月四日付、華国鋒「在記念五四運動六十周年大会上的講話」。

⑥⑦『毛沢東選集第二巻』六一年人民出版社刊、五四五頁―五四七頁、五四九頁―五五七頁。

⑧北望社刊『毛沢東集六』〈五四運動〉には「辛亥革命与五四運動的失敗、就是這箇原因」とあるによる。

⑨『新中国資料集成　第二巻』日本国際問題研究所編　昭三九年、五〇七頁

⑩五七年一月毛沢東の「省・市・自治区党委員会書記会議における講話」（毛選五巻、外文出版社七七年版、五一六頁以下）では知識人に厳しい評価をしている。これに依ったものか。

⑪『五四時期的社団(二)』（三聯書店七九年四月刊）二九三頁～二九六頁参照

⑫李星「試論五四運動的革命性質」（『学術月刊』六三年五号）陶凱「対五四運動革命性質的探討」（『江漢学報』六三年五号）、李竜牧「関於五四運動（『歴史研究』六三年三号）、路爾銘他「為什麽説五四運動是新民主主義革命的開始」（『歴史研究』六三年二号）他。

⑬劉伝珍他「不容歪曲〝五四〟新文化運動的歴史」（『文史哲』六五年二号）丹流「不応吹捧陳独秀」（『文史哲』六五年二号）。

⑭張允侯他編、三聯書店七九年四月刊。この本もすでに紙型となったまま十数年放置された。

⑮中国社会科学院近代研究所他編、中国社会科学出版社、『中華民国史檔案資料叢刊』の一部、八〇年二月刊。

⑯湖南革命史科選輯の一部、湖南人民出版社　七九年八月刊。

⑰『李大釗伝』編写組　人民出版社（七九年四月刊）の編集後記参照のこと。

⑱中国社会科学院近代研究所編　中国社会科学出版社（七九年一月刊）一頁～二二頁

⑲女史は四九年六月出版の『〝五四〟三十周年記念専輯』〈同委員会編　新華書店〉収録の「五四」運動的回憶で同様のことを述べている。また毛沢東自身も相当の影響を受けたと語っている。〔エドガー・スノー『中国の赤い星』（筑摩昭四七年版、著作集二）一〇三頁〕。

⑳『近代史研究』(一)（中国社会科学出版社七九年十月刊）四四～五七頁、その三　中西文化問題、四　知識分子的道路については省略。なおこの討論会の報告集は未着につき未見。

（附記）本稿校正中、註⑳に記す報告集（中国社会科学出版社刊、紀念五四運動六十周年学術討論会論文選（一）、（二）、（三））を披見することができたが、言及の余裕がないので別の機会に譲りたい。

執筆者紹介

町田三郎　九州大学文学部
辺土名朝邦　活水女子短期大学
小宮厚　九州大学大学院
大塚博久　山口大学教育学部
近藤則之　九州大学文学部